

総合的な学習における自己評価を基盤とした多面的評価システムの開発

— 小学校4年生「ハートクリーン作戦」の実践をもとに —

学校教育専攻

総合学習開発コース

三河秀喜

指導教官 村川雅弘

1 問題の所在

(1) 新学習指導要領と学力低下論争

2002年4月から全面実施となった新学習指導要領は、実施以前から学力低下論争を引き起こし、学校現場でも混迷の度を深めている。

佐藤学は、今の子どもたちにとって、より深刻な問題は、「学びの質」や「学びからの逃走」であると指摘している。このような問題は「生きる力」を育むための具体的な手だてを講じてこなかったため生じてきたのだと考えられる。

(2) 「総合的な学習の時間」の現状

村川雅弘らが行ったアンケート調査では、児童生徒はもちろん、教師や保護者・地域に対しても、「総合的な学習の時間」の教育効果が確認されている。しかし、学校現場における効果研究については、まだ試行錯誤の状態である。

(3) 教育評価の現状

「新しい学力観」での評価を考えるには、目標や学習内容が定められていない「総合的な学習の時間」から、その評価の在り方を探り、教育活動全体に広げることが適当であると考えられる。

(4) 「総合的な学習の時間」に対する自己点検・自己評価

「総合的な学習の時間」の評価を考えるときに注意しなければならないこととして、各学校の「総合的な学習の時間」自体の自己点検・自己評価という視点が考えられる。

イギリスでは、校長のリーダーシップの下、

その学校の実践に対する評価を行っているが、それを日本の学校教育に取り入れることは難しい。そこで、学校、児童、地域の実態に応じた評価システムを各学校で創り上げ、学校に位置づけ、機能させていくことが必要である

2 研究の枠組み

(1) 研究の目的

「総合的な学習の時間」での子どもの学習活動の充実・改善・発展のために、また説明責任を果たすために、各学校での評価システムの基本となるモデルを開発し、提案する。

(2) 研究の手順と方法

- ① 先行研究や総合的な学習に関する文部科学省指定の研究開発学校および研究先進校の研究実践から「総合的な学習の時間」における評価の基本的な考え方や手だてをまとめる。
- ② 「総合的な学習の時間」での評価システムのプロトモデルを作成する。
- ③ 作成した評価システムをもとにした単元を開発、実践し、その支援について検証する。
- ④ 授業実践の分析・調査結果を通して、評価システム自体の有効性や問題点を検証する。

3. 「総合的な学習の時間」における評価

「総合的な学習の時間」の評価を考える場合、「主体的な学びを作り出す子どもの自己評価」と「主体的な学びを支える教師の評価」が両輪となった評価活動が、基本となると考える。

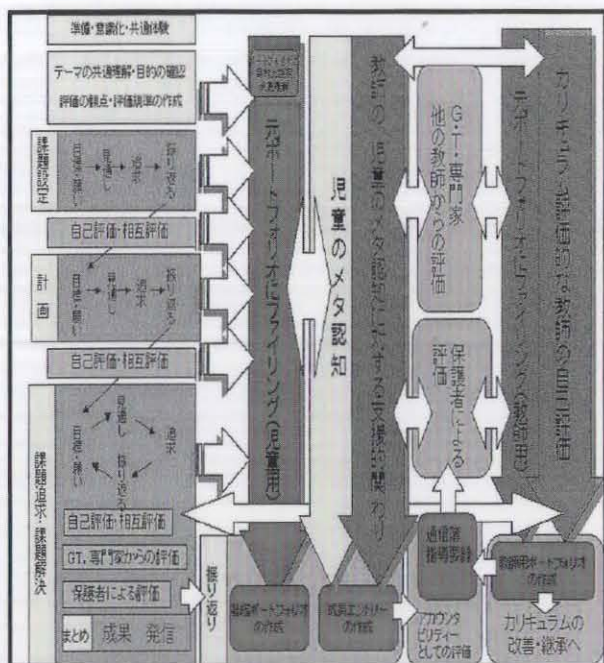
また、カリキュラムに児童の自己評価や相互

評価、複数の教師やゲストティーチャー、保護者からの評価等、様々な視点から繰り返し評価する場を設定し、その妥当性や信頼性を保ちつつ、評価の効果も高めていくことが大切である。

4. 「総合的な学習の時間」での評価システムモデルの構築とその実践

(1) 「総合的な学習の時間」での評価システムモデルの構築

本システムではプロジェクト学習の単元の流れに評価を位置づけるとともに、単元全体を通してポートフォリオを活用した子どもの自己評価を継続的に行う。教師は「対話」を通して子どもの自己評価を支援しながら、その自己評価情報等を元にカリキュラム評価も行っていく。



(2) 単元の実施結果と考察

① 単元について

対象者：徳島県石井町U小学校4年生児童
 実施期間：平成14年6月～11月 55時間
 授業者：対象校担任と研究者
 単元名：「ハートクリーン作戦」

自分たちの学校や校区のゴミを減らし、美しくするために、自分たちがやりたいことを考え、グループごとのプロジェクト学習を行う。同時に、子どもの「自己評価力」「自己肯定感」「自己成長感」「自信」「意欲」等の育成を図る

② 単元の実施結果と考察

ポートフォリオ評価の事前指導、「評価規準」の作成、自己評価カード、相互評価、教師・専門家・保護者の評価、「凝縮ポートフォリオ」「成長エントリー」等の評価システムの各活動の効果は、子どもの自己評価カードへの書き込みや実際の活動での変容、子どものアンケート調査、子どもや担任教師の聞き取り調査、保護者のコメント等から読みとることができた。

5. 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

- ① 評価をシステム化し単元の展開モデルに位置づけることによって、多様な評価が計画的効果的に実施されると同時に、その評価を生かした単元や学習活動を構想することができた。
- ② 本評価システムによって、「指導（学習）と評価の一体化」が図られた。また「自己評価力」や「自信」の創出という効果も見られた。
- ③ 本評価システムの有効性は、実際に活用する教師や子どもたちの評価観に左右される。本評価システムの導入を評価観の転換の機会ととらえ実践していくことが大切である。

(2) 今後の課題

- ① 本評価システムが無理なく運用できるように、システムの再吟味と精選を図る。
- ② 子どもの内面に及ぼす効果をも視野に入れた評価システムを開発する。
- ③ 学校の教育目標や評価システム自体の評価も視野に入れた学校レベルの評価システムを開発する。